資料研究：Charles Lanman 著　“The Japanese in America”(1872)

2011/9/10　　米欧亜回覧の会･会員　鵜飼直哉　(改 2)

目次

[序]
[Ⅰ]　Charles Lanman 著　“The Japanese in America”(1872) 3
（1）　Part-Ⅰ　The Japanese Embassy　岩倉使節団の記録
（2）　Part-Ⅱ　The Japanese Students
序文（pp55-66)の要旨
小論文 14 編
（3）　Part-Ⅲ　Life and Resources of America　「森有禮の見たアメリカ」
[Ⅱ]　チャールス･ランマン著　岡村喜之編　「岩倉公一行訪米始末記」 6
（1）Preface　（岡村喜之）
（2）Biographical Notes　（H.Kodama,Ph.R）
[Ⅲ]　John E. Vansant 編　Mori Arinori's“Life and Resources in America” 8
（1）構成
（2）Preface　（入江昭 Akira Iriye･筆）
（3）Introduction　（Vansant）
☆　この本の読み方
☆　定本と底本について
☆ :著者は誰か？
☆　岩倉使節団
[Ⅳ]“The Japanese in America”の謎 10
（1）　なぜ“The Japanese in America”は忘れられたか？
（2）　なぜ「米国在留日本人」か？
（3）　なぜ「岩倉公一行訪米始末書」は無視されたか？
（4）　米欧回覧実記に森有禮が登場しないのは？
（5）　久米邦武は“The Japanese in America”を読んでいたか？
Appendix－1　1871 年版“Life and Resources in America” 12
Appendix－2　米国版と英国版の“The Japanese in America” 13
Appendix－3　もうひとつの“The Japanese in America” 14
Appendix－4　（補足）そのほか幾つか調べたこと 15

以下、①79.07 は実記(岩波版)第一編 79 頁の 7 行目の意味、
最初の文字（一)は明治 11 年版、①は岩波版、❶は現代語訳版、E1 は英文版を指す。
また、⇒［XXX YYY］は XXX YYY で Google 検索することを意味する。
暦日に関しては、太陽暦は英数字で、旧暦は漢数字で記す。

“The Japanese in America”という本を入手したことから、このレポートを書くことになった。

最初はせいぜい 2 枚程度だろうと思っていた。ところが確認のためにネットの検索を使って調べ始めると次々に新事実がみつかる。「岩倉公一行訪米始末書」はネットで見つからないので国会図書館に出かけたら更に興味が沸きだした　（このレポートを書くに当たり外出はこの一回だけ。それ以外の情報収集はすべてインターネットの検索によるもので、自宅の書斎から一歩も出ていない。インターネットがなかったら、いくら時間をかけても世界中の情報を集めることは不可能だ。ネットを利用した研究の一例でもある)。

ネットで見た限りでは、以下の問題は今まで誰も手を付けていないようだ。こうなったら徹底的に調べないと気が納まらない。やるだけやってみたら 15 枚になってしまった。諸先輩の皆様のご意見を賜れれば幸いである。

[序]

1872 年 1 月 23 日に伊藤博文が英語で話したという「日の丸演説」の原文を検索で探していたら、Charles Lanman 著"The Japanese in America" と題する本に出ていることが分かった。幸い amazon から BIBLIO-File 発行版を入手できた。2 月上旬にオーダーしたものが、3 月 11 日にやっと届いた（東日本大震災の 2 時間前だった）。発行日は 22 Feb 2011 になっているから、まさに出来立てのホヤホヤだ。

原著の発行は 1872 年。この新版は Lanman (1819-1895)の原著（University Publishing Co. NY）をコピーしただけの忠実な復刻版で、「"Public Domain"にある歴史的重要書籍の復元をすることが BIBLIO-File の役割」という mission statement が唯一書き加えられているだけである。

赤い表紙の日本語の題名は**「米国在留日本人」**であるが内容は**「アメリカに於ける岩倉使節団の記録」**[1]とでもいうべきもので、書名の印象とは別物である。

1872 年末、使節団はやっとロンドンからパリに移動して視察の最中である。1878 年の久米邦武編「米欧回覧実記」が起点と思い込んでいた私には、それ以前に使節団に関する書物がある事が驚きだ。その上、この本はこれまでに発表された数多くの実記研究第一人者の書かれた論文などにほとんど引用されていないようすだ。田中彰(岩波版)、水沢周(現代語訳)両氏の膨大な脚注にもこの本の引用は見当たらない[2]。

1872 年発行の原本と内容は同じものをイギリスの Chiswick Press が出版している（国会図書館蔵）。装飾文字の利用など米国版よりも手が掛かっている（Appendix－2）。発行年は同じ 1872 年。その他インド[3]でもこの本が出版されており、当時はかなり読まれていたらしい。

なお、**"The Japanese in America"**の全文は、次の URL で直接読むことが出来る。
http://openlibrary.org/works/OL1619575W/The_Japanese_in_America
http://www.archive.org/details/japaneseinameric00lanmrich
ここで PDF を選択すると全文を読めるし、"Read Online" では内容を読み上げてくれる。

さらに調べると、昭和 6 年、日本で発行されたことも判った。

「岩倉公一行訪米始末書」岡村喜之著（北星堂書店　1931 年）

この発行にともない、英文タイトルを **"Leaders of the Meiji Restoration in America"** に改めている。

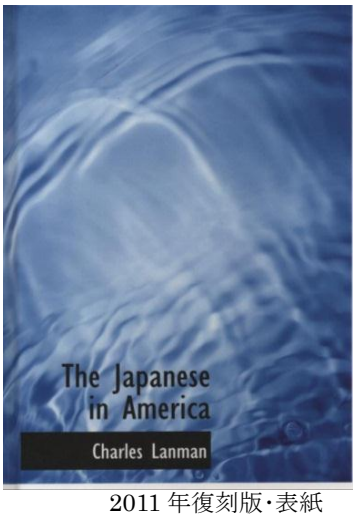
もう一つ、**John Vansant 編　"Mori Arinori's LIFE AND RESOURCES IN AMERICA"** という本の英国国会図書館所蔵版を 2004 年に LEXIGTON BOOKS が出版している。
これは"The Japanese in America"の Part-Ⅲ に相当する部分である。
初版は岩倉使節団の出発前に日本に届けるため、1871 年に発行された。

以下、これらの本の概要を順にご紹介する。

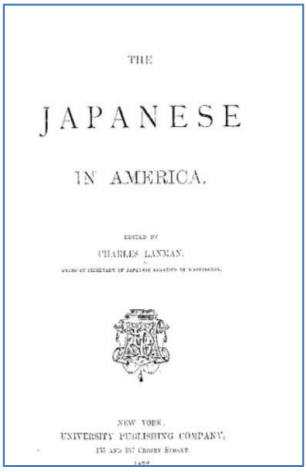
---

[1] この日本語タイトルは本稿での説明の便宜上で付けたもので、正式なものではない。
[2] 手許にある使節団関連文献の中では、田中彰･高田誠二編「･･･の学際的研究」の「索引」p145 にあるのみ。
[3] http://www.bookadda.com/product/japanese-america-1872-charles-lanman/p-9780217591546-021759154X

［Ｉ］ Charles Lanman 著 “The Japanese in America” (1872)



2011 年復刻版･表紙


THE
JAPANESE
IN AMERICA.
CHARLES LANMAN.
NEW YORK.
UNIVERSITY PUBLISHING COMPANY,
“The Japanese in America”中表紙

1872 年版･表紙

序文には、

「本書の目的は三つある：第一に、日本の天皇の信任状を受けて米国に派遣されてきた使節団に関する公式の記録を纏めること、第二に現在滞米中の日本人留学生に各自の考えを小論文として提出させること、第三に駐米弁務官･森有禮の指示で（自分が）米国について纏めた論文を再発行することである。この三番目の論文“Life and Resources of America”は日本語に翻訳したのち日本国内でのみ配布される予定であったが、米国での出版を多くの知人に薦められて、森有禮はこの英語版を出版することにした」

と書いている。

（１） Part- I The Japanese Embassy 岩倉使節団の記録（全 50 頁）

冒頭、「1872 年 1 月 12 日、ワシントン駐在の少弁務使･森有禮は Hon Hamilton 国務長官宛に次の書簡を送った」として使節団がワシントンに近日中に来ることを伝えた書簡を示している。

☆ 以下、最初の 33 頁(pp5-37)は一行の滞米期間中の主な公式行事に於けるアメリカ側と日本側との発言とそれを伝える現地の新聞記事の記録。

たとえば 1 月 22 日の記録(pp12-21)は；

岩倉具視が日本語で挨拶した後に Mr.Tadas Hyash（林 董（タダス））が読み上げたという文章(200 語)に続き、伊藤博文の「日の丸演説」全文(約 1,200 語)が「耳を劈くような拍手と歓声で何回も中断した」という説明付きで載っている（コピー機も録音機もない時代だから、これは Lanman が口述筆記したものか？)。続いて Hon C. E. DeLong の“Our Relations with Japan”と題するスピーチ（約 1,100 語)があり、「どの新聞も一行に対する大歓迎の記事で一杯だが、その中で Daily Evening Bulletin 紙のもの(約 1,400 語)を紹介」している。

一行がサンフランシスコからワシントンに向けて出発して以降も同じような調子である。

アメリカで報道された様子を知る上で興味深いものを数点挙げておく。

- ✧ 1871 年 11 月、明治天皇が使節団に関して述べられたお言葉(p6-7)。
- ✧ モルモン教の教祖 B. Young と使節団とのやりとりに関する現地の新聞報道(p23-24)。
- ✧ 米国政府が使節団歓迎に$50,000 を用意したことに対する Mr.Mori の関与(pp25-27)。

✧　ワシントンでの Grant 大統領の謁見の過程と Mr.Mori の役割（pp30-39）。

✧　岩倉具視が Grant 大統領に出した天皇の書簡の official translation（pp31-32）。

Lanman の記述はワシントンで終わっている。

☆　続く 8 頁（pp37-44）では、岩倉具視と四人の副使の簡単な略歴紹介をした後で、森有禮の米国政府と日本政府との橋渡し役としての実績を 4 頁を使って書いている。

☆　Part-1 の最後の 10 頁を、この使節団が 5 人の若い女性たちを伴ってきた背景説明に当てている。日本で女性の人権がまだ低いこと、女性の教育が急務であったことなどの認識から Mr.R.Kuroda（黒田清隆）と Mr.Mori との説得の結果であった、との説明。
日本の教育問題をこの 5 人の観察から語る Lanman の日本観が面白い。

(2)　Part-Ⅱ　The Japanese Students
日本人留学生 8 人に書かせた小論文 14 編

[序文（pp55-66)-の要旨]

「いままでにアメリカに来たことのある日本人の学生は総数およそ 500 人で、現在 200 人が留学中である。そのうち大半は公費留学であるが、裕福な親族に頼っている者や私費留学生も数人いる。」（学生たちが周囲から高い評価を得ているとの記述）

彼等の米国での保護者であった Mr.Mori 宛で多くの書簡が寄せられていた。そこに書かれた幾多の意見は日米の理解に役立つものであり、Mr.Mori はそれを公開することが必要と思っていた。

(このあと、キリスト教問題など数例を(p57.29-p66.09) 詳しく説明し)、キリスト教を日本文化の柱にしようという主旨を書くことになっていた一人の学生のエッセイが、残念ながらこの本の発行納期に間に合わなかった」と結んでいる。)

[小論文 14 編]

未読。目次のみ記す。著者名の漢字記載は岡村喜之著「岩倉公一行訪米始末書」の Biographical Notes（pp381-385）を参照した。

The Practical Americans	Enoue (E.R.Inouye)	p67
The Chinese Ambassadors in France	Toyama (外山正一)	p72
Co-Education of Boys and Girls	Takato (Shioji Takato)	p78
Oriental Civilization	Hicomaro (Hikomaro Yoshida).	p81
History of Japan	Megata (目賀田種太郎).	p86
Christianity in Japan	Hyash（林董）	p91
The Strength and Weakness of Republics	Enouye (E.R.Inouye)	p94
Japanese Costume	Kanda (神田乃武)	p100
A Father's Letter	Neero (G.Neero).	p103
The Memorable Year	Enouye (E.R.Inoue).	p108
George Washington	Kanda (神田乃武).	p114
Public and Private Schools	Enouye (E.R.Inoue).	p117
Christmas	Kanda. (神田乃武)	p124
Japanese Poetry	Takaki (高木三郎)[4]	p127

[4] 原本は「Takaki (高木三郎)」であるが、目次の校正ミスと思われる。⇒本稿 Appendix-2

(3) Part-Ⅲ　Life and Resources of America　「森有禮の見たアメリカ」

全 352 頁の“The Japanese in America”の中で 217 頁を占める Lanman の大作。
序文の一枚だけは森有禮が次のように書いている（大仰な言い回しが気になる上に、文章も英語もお世辞にも上手いとはいえない）。日付は 1871 年 9 月（明治四年七月）。

> The knowledge furnished by all the better qualified minds of the world is a powerful element, rendering great service in the cause of humanity. It is often the case that enmity and bloodshed are the consequence of storing up prejudices, resulting from the want of mutual knowledge of the parties engaged. The object of this publication is not only to aid in removing those prejudices, but also to invite all the lovers of their race, in Japan, to join in the noble march of progress and human happiness.
>
> In view of the fact that many dates are mentioned in this volume, it has been found necessary, for the sake of convenience, to adopt the western calendar altogether, and it is hoped that this course will not lead to any embarrassment in the mind of the reader.
>
> ARINORI MORI.
> Washington City, U. S., September, 1871.
> Or, according to the Japanese Calendar, the
> Seventh month of the Fourth year of Mcidi.

本文は未だ斜め読みしかしていないから、目次だけ以下にコピーする。

Introduction	
Official and Political Life	p143
Life among the Farmers and Planters	p159
Commercial Life and Developments	p186
Life among the Mechanic	p203
Religious Life and Institutions	p215
Life in the Factories . . .	p246
Educational Life and Institutions	p205
Literary, Artistic, and Scientific Life	p282
Life among the Miners	p301
Life in the Army and Navy	p812
Life in the Leading Cities.	p322
Frontier Life and Developments	p337
Judicial Life	p344
Additional Notes	p351

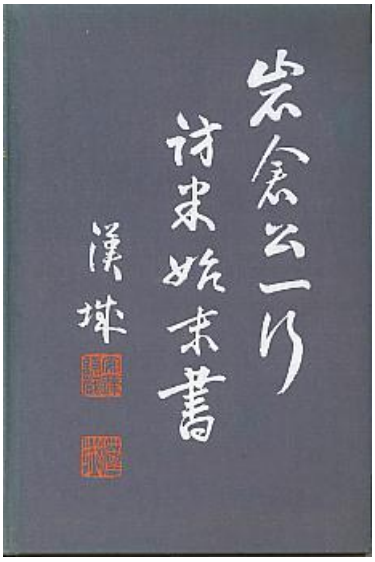
この本の最後の結び部分(Additional Notes, p352)を以下に引用する。

> But when the Ambassadors, and the other high officials who accompany them, are informed as to the warm welcome which is in store for them from the Government of the United States, and many of the leading men and corporations throughout the Union, and when they shall have experienced the unbounded hospitality of the American people generally, they will undoubtedly be deeply impressed, and effectually convinced that America and Japan are strongly bound together by the cords of sincere regard and unselfish affection.

[Ⅱ]　チャールス・ランマン著　岡村喜之編
「岩倉公一行訪米始末記」（北星堂出版 1931 年）
“Leaders of the Meiji restoration in America”

[“Lanman” “Japanese in America”]で画像検索してみたら、**「岩倉公一行訪米始末記」**という見たことのない本の表紙があった。ところが⇒[**“岩倉公一行訪米始末記”**]　では古書店のリストが一件あるだけで、この本を引用したサイトは一つもない。古書店の頁で調べると一冊だけあった。ともかくオーダーした。数日後、書店からメールがきた。すでに在庫はなくなっていた、リストのアップデートをしなかったとの詫び状だった。

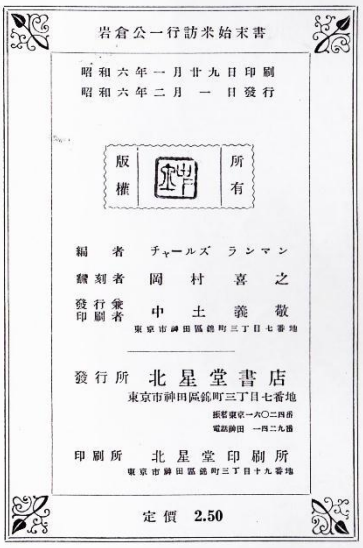
やむを得ず国会図書館に行き、「岩倉公一行訪米始末記」[5]の本文以外の部分をコピーしてきた。



「岩倉公一行訪米始末書」表紙
安達謙蔵・筆

LEADERS
OF
THE MEIJI RESTORATION
IN
AMERICA
EDITED ORIGINALLY UNDER THE TITLE
"THE JAPANESE IN AMERICA"
BY
CHARLES LANMAN
AMERICAN SECRETARY OF JAPANESE LEGATION IN WASHINGTON
REVISED BY
T. OKAMURA
THE TITLE OF THIS BOOK IN JAPANESE WRITTEN BY
HIS EXC. KIKUJI ADACHI
MINISTER OF THE INTERIOR
LETTERS TO THE EDITOR FROM
MR. ICHIRO TOKITOMI
With Biographical and Editorial Notes by
H. KODAMA, PH.D.
THE HOKUSEIDO PRESS
KANDA, TOKYO

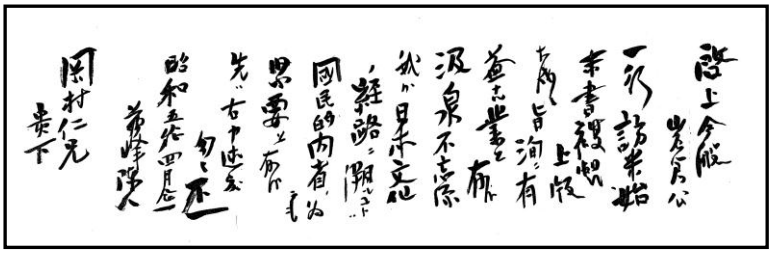
岩倉公一行訪米始末書」
中表紙


岩倉公一行訪米始末書
昭和六年一月廿九日印刷
昭和六年二月　一　日發行
版權所有
編者　チャールズ　ランマン
繙刻者　岡村喜之
發行兼印刷者　中土義敬
東京市神田區錦町三丁目七番地
發行所　北星堂書店
東京市神田區錦町三丁目七番地
振替東京一六〇二四番
電話神田　一四二九番
印刷所　北星堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目十九番地
定價　2.50

「岩倉公一行訪米始末書」
奥付

本文は“The Japanese in America”と同じだが、全文をリタイプしてあるので、2011 年版よりも綺麗だ。

実は、本書のタイトルを見たとき、日本語版の出版であると思いこんでいた。実際には原文のままであった。


「岩倉公一行訪米始末書」折り込み

右上の奥付の様子は完全な日本の出版形式である。

中表紙（上中図）に、「Charles Lanman 著、原著“The Japanese in America”からの再編集・岡村喜之、表紙・内務大臣安達謙蔵、Letter to the Editor・徳富一郎、注記・H.Kodama と 5 人の名前がある。Letter to the Editor は上に示した横長の折り込みを指すものと思われるが、ペンネームらしき著者名が徳富一郎のものか否かは未確認。

5　国会図書館・請求記号 952031－L2911.　2011 年 8 月現在、全文をネットで読むことはできない。

本文は“The Japanese in America”のままであるのでここでは省き、岡村喜之の Preface（pp.v-xii）と H.Kodama の注記（pp349-388）から面白そうな部分を拾ってみる。

（1）Preface　（岡村喜之）

「1928 年の秋のある日、California 州 Pasadena の古書店で顔なじみの店主と雑談をしていたおり、そばの書棚にあった赤い表紙の本が目に入った。表紙の「米国在留日本人」は“The Japanese in America”と言うタイトルの日本語に相当する。このタイトルに引かれて 75 セントで購入した本[6]は、私の気まぐれな好奇心をとりあえず満足させた。帰宅して本を開いてみた。今までにこれほど読者の関心を呼び起こし、歴史的価値に満ちた本があっただろうか？」

このあと岩倉使節団の簡単な紹介に続き、1902 年 3 月 20 日に貴族院クラブで開催された使節団関係者のパーティ（26 人参加）における福地源一郎[7]の挨拶を二頁半使って紹介している。

岡村喜之は Preface を以下のように書いて岩倉使節団の成果としている。

> Many and far-reaching are the results and influences that the party brought back from abroad, baffling any simplification. Yet if we venture to summarise, the most important of the results may be stated as：
> ① vigorous introduction of Western learning and institutions；
> ② the installation of the Constitution and the inauguration of Parliament；
> ③ the successful revision of the unequal treaties upon the basis of the principles of equality；
> ④ the forced reflection of the people upon themselves, especially upon something like national self-conceit；
> ⑤ hence, the recognition of the importance of attending first to the domestic affairs, which was immediately most eloquently expressed in the opposition by the newly returned people against the invasionistic policy as reprisal toward Korea.

最後に「1930 年 12 月東京にて記す」と書いている。

編集の岡村喜之についてはよく判らないが、日米関係が一触即発状態であった 1930 年にこの本を英文のまま日本で発行した勇気に感動する。

（2.）Biographical Notes　（H.Kodama,Ph.R[8]）

40 頁もの注記がある。その大部分が日本人や日本の制度に関するものであるのはやむを得ない。引用に使った文献のリストがきちんと出ている事は留意に充分値する。

森有禮についての詳しい紹介がある（p351-352）

---

[6] この話は芳賀徹先生と米欧回覧実記との出会いの話（1990 年 1 月 11 日 NHK 市民大学で放映）を思い出させる。
[7] 日本語の原文は？
[8] 慶応大学・児玉省教授か？

[Ⅲ] John E. Vansant 編　　序文：入江昭
Mori Arinori's "Life and Resources in America"
「森有禮の見たアメリカ」　（2003 年 Lexington Books）

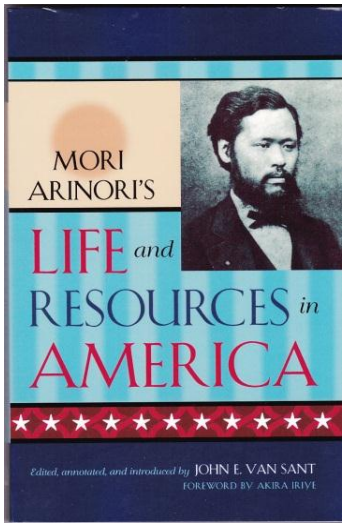
（１）構成

3 ページの Preface に続く Introduction が面白い。本文は "The Japanese in America" に同じ。更に Appendix として森有禮の書いた以下の二篇が追加してある。

① "Religious Freedom in Japan"[9]　三条実美宛の書簡（1872 年 11 月 25 日）

② "Religious Charter of the Empire of Dai Nippon"（1873 年）

詳しい参考文献リストがある（pp.xxxiii－xxxvii, pp153－156）。



「森有禮の見たアメリカ」表紙

(写真の使用許諾申請中)

（２）Preface　入江昭[10]Akira Iriye･筆　　――（略）――

（３）Introduction[11]

East Meets West　：
Mori Arinori and the Formative Years of
United States ― Japan　Relations
(J.E.Vansant)

全 22 頁の Introduction は森有禮の紹介と明治維新の解説であるが、"The Japanese in America" の謎を解く鍵が幾つも入っているので、そこに焦点を当てて原文を引用する。以下、引用部分は「」で括る。

☆　この本の読み方

「"Life and Resources in America" には三つの読み方がある。

① 南北戦争後半世紀の米国社会の記述として

② 若い血気盛んな一人の日本の役人が米国について観察し感じた記録として

③ Mori と Lanman とが日本に導入しようとした米国文化について」

☆　定本と底本について

「"Life and Resources in America" の初版[12]は 1871 年末に発行され、その後、Lanman と Mori による "The Japanese in America" の Part-Ⅲとして 1872 年秋に出版された。1872 年版の "Life and Resources in America"は 1871 年発行の初版の総ページ数を減らすために reformat してあるが一字一句同じに retype してある。

以下に示す 2003 年版の "Life and Resources in America" は 1871 年版と 1872 年版との完全なコピーであるが、私(Vansant)が文法上の変更を加えた部分もあるので所謂コピーではない。Mori と Lanman の文章は時として長過ぎるものがあり、その場合は分割した」

「"The Japanese in America" は 1931 年に若干の加筆をして "Leaders of the Meiji restoration in America" として再発行された」

---

[9] Ivan Hall 氏によると「森は『日本における信仰の自由』というパンフレットを出版した。（中略）これは三条実美にも送られたが日本語訳はされなかった」（p20）

[10] http://en.wikipedia.org/wiki/Akira_Iriye

[11] Introduction は以下の URL で読むことができる。
http://books.google.com/books?id=j_VMAzXEFuEC&pg=PR22&lpg=PR22&dq=%22the+japanese+in+america%22++22ivan+hall%22&source=bl&ots=jgrU0O1lMG&sig=v5daO4UeagZz6s4uo7WJ99ijOB4&hl=en&ei=pyoQTqXtLabzmAX0srimDg&sa=X&oi=book_result&ct=result&resnum=1&sqi=2&ved=0CBgQ6AEwAA#v=onepage&q&f=false

[12] 国会図書館･請求記号 48-27

「“Life and Resources in America”は最近（1999 年）、日本から**大久保利謙監修『新修森有禮全集(1999 年 宣文堂)**・第六巻』[13]の中で republish[14]された」

「これより早いものとしては**大久保利謙編『森有禮全集(1972 年・宣文堂書店)・第三巻』**[15]がある」

但し“Life and Resources in America” からは Mori の Introduction と“Educational Life and Institutions Educational Life and Institutions”だけが入っている」(以上、p.xxi, p.xxxii, p.xxxv)

☆:**著者は誰か？**

「1871 年発行の“The Japanese in America”の最初のタイトルページに

“Prepared under the Direction of Arinori Mori. For Circulation in Japan”

とある。また、1872 年の“The Japanese in America”には

“‘The Japanese in America’ was compiled under the direction of Arinori Mori”

更にその後、Lanman が“Leading Men of Japan”（1883 年 D.Lothrop Co.)p136 で、

“Mori caused the publication, for the benefit of his countrymen, of a work on the Resources in America”

と書いている。これをみるとこの作品は森有禮が単独で仕上げたのではなく、Mori の選んだテーマに関する調査とドラフト書きとは Lanman が行い、Mori が自分の意見を書き加えて編集した。

Ivan Hall[16]は、

“although Lanman’s in point of research and expression,‘Life and Resources in America’ was Mori’s in overall concept, with his editorial hand clearly visible on points of judgment”(p.xxii.29)

故に、現代（2003 年）の出版業界の表現をとるとすれば、本書の表題は

“Life and Resources in America, by Mori Arinori, with Charles Lanman”

となるだろう（p.xxii.32)」

「この本の著作権の問題[17]は、1871 年 2 月に米国留学中の日本人学生たちにエッセイを書かせ、その情報やアイディアを Lanman の原稿を再編集する際に使っているので、更に複雑である」

☆ **岩倉使節団**

「1871 年版と 1872 年版とはいずれも日本人読者を意識したことはテキストから読み取れる。しかしながら本書の日本語版が出版された形跡はない。

岩倉使節団が日本を出発する前に Mori は 1871 年版を東京の日本政府に送付している。目的は使節団が米国の政府、社会、文化について、多少なりとも知識を事前に持たせることであった」

「では何故日本語の“Life and Resources in America”は出版がされなかったか？ （時代背景を考慮すると）どうも Mori（または政府内の責任者）は未だ不安定な日本の政治情勢を考えて、米国寄りの表現での出版は好ましくないと考えたようだ。事実、「木戸日記」には日本政府の高官たちが、Mori が米国式一辺倒であったとの記述がある。

或いは、Mori が公務に多忙で翻訳作業に時間がとれなかったのかも知れない。

いずれにせよ“Life and Resources in America”はごく少数の日本人にしか読まれておらず、この作品の日本社会への影響は限られていた」 (pp.xxii.13－xxiv17)

---

13 国会図書館には「新修森有禮全集」は・第五巻までで第 6 巻はない。「別巻 1 復刻篇」の事らしい。
森有禮文献リスト：http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/bunken/mori-arinori.html

14 全集に掲載されるものは既に他のメディアで発表されたはずであり、これを republish というのは馴染めない。

15 国会図書館・請求記号 US21-42

16 http://www.jpri.org/publications/workingpapers/wp2.html
著書に“Mori Arinori”（1973 年 Harvard University Press）あり。
本稿 p10「なぜ“The Japanese in America”は忘れられたか？」

17 著者の没後 50 年以上経過している現代は“The Japanese in America”本文に関してはこの問題は存在しない。

［Ⅳ］“The Japanese in America”の謎

（１）なぜ“The Japanese in America”は忘れられたか？

本稿冒頭に述べたように、なぜか“The Japanese in America”は実記研究者には忘れられた存在のようである。手持ちの資料を調べてみた。

使節団派遣 130 年記念シンポジウム（2001/11/23-11/24 学術総合センターで開催された）

「岩倉使節団ワシントン滞在中の森有禮の役割」に関する講演を行ったアイヴァン･ホール氏[18]の講演録（米欧回覧の会･編「岩倉使節団の再発見」思文閣出版 pp15-21）によると Lanman について以下のように語っておられる；

「森は岩倉使節団のために社交的な接待やパーティをしきりに催した。（中略）
こうした計画は勿論森ひとりでできたわけではない。チャールズ･ランマンという森が公使館アドバイザーとして雇っていた人物が手伝ってくれたのである。
ランマンは日本びいきで、よく協力してくれ、日本のことをアメリカに紹介することも積極的であった。森と協力して書いた“Life and Resources in America”という英語の本がある。
森はそのほかにも英語で書いた本がいくつか（『日本における信仰の自由』『日本の教育』など）あるのだが、それらのスペルチェックなどもランマンが協力している。ランマンはある意味で善意に満ちたアメリカ人の典型だったと言えよう」

として、1872 年“The Japanese in America”には触れていない。講演の文脈を考えるとこの本の存在を知っておられたら、著書に“Mori Arinori”のある Ivan Hall 氏は当然言及されたものと考えてよいだろう。

インターネットで調べてみると“The Japanese in America”は現代でも日米比較文化史では多数の研究論文に引用されている反面､その書名が災いしたためか実記研究者の目には止まらなかったのだと思う。

（２）なぜ「米国在留日本人」か？

本稿 p3［Ⅰ］で紹介したように Lanman は“The Japanese in America”の第一目的は、岩倉使節団 の米国での公式記録作成であると述べている。しかし、本文を読んでみると、至るところに“Mr.Mori”が使節団の支援した活躍ぶりを克明に追っている。

岩倉使節団の記録は手段であって目的ではなかったと考えられる。

弱冠 23 歳で初代駐米公使（少弁務官）として使節団受け入れ準備に奔走した Mr.Mori の活躍ぶりを PR することが目的であった。

従って書名の「米国在留日本人」も“The Japanese in America”もともに森有禮を指すものであろう。

これを 1872 年に出版したのは、単に血気盛んな一人の外交官の若気の至りではなさそうだ。森有禮が Lanman にこの本を急いで書かせたのは、森と使節団との関係、中でも木戸孝允との関係がきわめて悪くなったことが背景にあると思う。

（３）なぜ「岩倉公一行訪米始末書」は無視されたか？

「岩倉公一行訪米始末書」で検索しても、これを引用した文献は皆無である。“Leaders of the Meiji Restoration in America”では 300 件ほど見つかるが､米英の古書店かディジタルライブ

---

[18] Ivan Parker Hall　⇒本稿 p9「★:著者は誰か？」

ラリーのページだけだ[19]。
問題は 1931 年（昭和 6 年）発行にあると思う。この年、満州事変が勃発しアメリカが日本を激烈に批判、日本は国際的な孤児になった。そんな雰囲気のなかで親米的文書が、しかも英文のままで出版されても受け入れられるわけがない。
結局、この意欲作もごく少数の限られた人の手に入って終焉したとみるべきだろう。
なぜこの年に北星堂が出版に踏み切ったか、謎である。

(4) 米欧回覧実記に森有禮が登場しないのは？

私が調べた限りでは、「森有禮」が米欧回覧実記に引用されるのは以下の二カ所である。

a. ❶201.06, ①191.11　（第 9 章の最後。一行が雪の中、シカゴからワシントンに到着する）
「この市を出発した頃から雨雪が降りしきるようになった。ワシントン市に至るまでにもう 10 センチほども積もった。午後三時にワシントンの議事堂近くの駅に到着。在米の弁務使をはじめ、アメリカ政府の接伴掛ゼネラルーメヤーも駅まで出迎え、馬車を走らせてヴァーモントーアヴェニューのアーリントンーホテルに宿を定めた」

b. ❶275.04、①255.04　（第 14 章の冒頭。ナイアガラなど北部巡覧の旅へ出発する）
「米連邦政府の招待で接待掛メヤー将軍の案内により北部の名所を遊覧することとなった。昨四日午後九時二五分、議事堂北の駅から寝台車二両に乗って出発した。上院議員バンクス将軍の夫人と娘、メヤーの娘も同行している。また森弁務官も、書記官とともに随行している。発車した時はもう夜だったので、途中見るところもなかった。ただ、草原や森林の中を蛍が飛びまわっているのが見えるだけである。まもなく寝床に入った」

僅か二回、そのうちの一回は役職名だけ、しかも日本を代表する初代駐米公使に関する記述が単なる出迎え役とはどう考えても不自然だ。Ivan Hall 氏や田中彰先生①pp384－387（①p204, ①p204, ①ｐ212, ①216 に関する校注）など:多数の証言で森有禮が岩倉使節団のために果たした役割は大きい。
これは多分、実記の取りまとめの段階か推敲のどこかで、木戸孝允からの圧力を受けた久米邦武が「森有禮」の名前の付いたつ部分を全部削除したのではないかと思う。
但しこれは根拠のない想像であり、素稿を調べないと判らない。

（5） 久米邦武は“The Japanese in America”を読んでいたか？

森有禮が出版した“Life and Resources in America”は果たして岩倉使節団の訪米準備に利用されたのだろうか？　印刷部数も少なかったこと（⇒Appendix－1）などを考慮すると、岩倉具視も久米邦武も出発前に知っていたとは考えにくい。
では、米欧回覧実記を纏めるために参考にしたのだろうか？
出典や参考文献の記載のない米欧回覧実記ではこの設問に対する答は見当たらない。
しかし、細かく検討するとヒントが見つかる。
ここでは①88.10 に「デンマン女学校」を「ランマン女学校」と誤記[20]をしている事に着目したい。
「アンマン」でも「ケンマン」でも「テンマン」でもなく「ランマン」なのだ。
Lanman は女子教育に力点を置いている。久米邦武が“The Japanese in America”を帰国後読んだ覚えがあれば、何回か推敲を繰り返す過程で、この印象から発生した可能性が高い。
確証はないが、ここでは森有禮の顔を立てて、設問には“YES”と答えたい。

---

[19] Ōkubo Toshimichi: the Bismarck of Japan　著者：Masakazu Iwata

[20] 1870 年のサンフランシスコの学校リストには Denman Grammer School はあるが、Lanman の名はない。
http://www.sfgenealogy.com/sf/1870m/1870m003.htm

Appendix－1

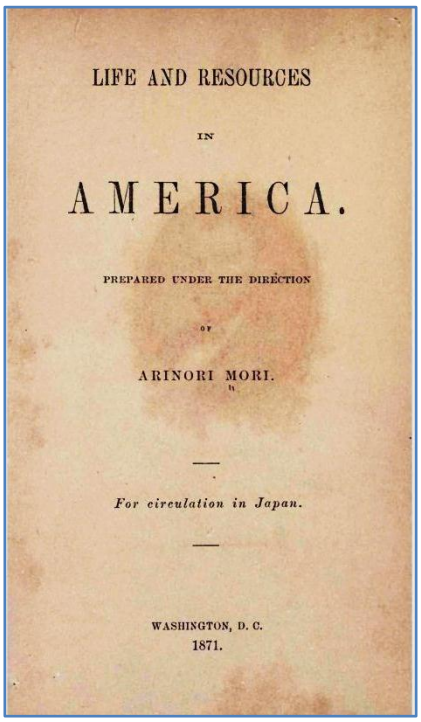
1871 年版“Life and Resources in America”

森有禮が岩倉使節団の日本出発に間に合わせようと書き上げた“Life and Resources in America”の1871 年版は次の URL で読むことができる。

http://www.archive.org/details/lifeandresources00moririch

よくみると中表紙には、“PREPAIRED UNDER DIRECTION OF **ARINORI MORI**”と書いてあり、著者Lanman の名前が出てこない。どこかにあるだろうと他のページも探したが、この版の中に“Lanman”の文字は見当たらない。これでは Lanman も面白いわけがない。

“For circulation in Japan”と書いてあるのをみると、もともとアメリカでの出版予定はなかったようだ。出版社名も書いてないから、ごく一部の人だけに渡された資料らしい。


LIFE AND RESOURCES

IN

AMERICA.

PREPARED UNDER THE DIRECTION

OF

ARINORI MORI.

For circulation in Japan.

WASHINGTON, D. C.
1871.

Lanman が森有禮に雇われたのは 1871 年 9 月で、1871 年版の Introduction に森が書いた日付（⇒本稿 p 5）と同じ月だから、この版はそれ以前に完成していたことになる。何かの縁があって出会った森のゴーストライターとして働く契約を交わしたことは充分ありえる筋書きだ。

1871 年 9 月から丸一年間森の私設秘書となった経緯は不明だが、Lanman の仕事が“The Japanese in America”の著述･出版であった事は疑いない。

ここから先は単なる推察であるが、“The Japanese in America”を自分の名前で出版したとは言っても雇い主の“direction”とあって Mr.Mori 礼賛に終始したのは Lanman の本意ではなかった。」いくら初代駐米公使の肩書があっても所詮は 23 歳の若造を相手にした 52 歳の Lanman との間に不協和音があったとしてもおかしくない[21]。

Lanman は、初版“The Japanese in America”の出版を機に職を辞し、英国での再出版に至ったのではないだろうか（⇒Appendix－2）。

21　今のところ森有禮と Lanman との不仲説を裏付ける資料は見つかっていない。

Appendix－２

米国版と英国版の“The Japanese in America” (次頁脚注★)

検索で調べてみると、1872 年発行の“The Japanese in America”には、米国版と英国版との二種類がある事が分かった。

	米国版（オリジナル）	英国版（完成版）
タイトル	The Japanese in America	The Japanese in America
日本語タイトル	米国在留日本人	なし
出版地、出版年	New York, 1872	London, 1872
著者または編者	Lanman	Lanman
出版社	University Publishing Company.	Longmans, Green, Reader, and Dyer
表紙	赤色に金文字でタイトル	青色
中表紙のロゴ (見分けるには最も簡単)		
国会図書館･請求記号	特 17-079	9173-L291j
URL	http://openlibrary.org/works/OL1619575W/The_Japanese_in_America	

文章の相違点

① Part-1　The Japanese Embassy
冒頭部分（⇒本稿 p4）など Mr.Mori ぶりを強調した文を削除。

② Part-Ⅱ　The Japanese Students
論文を二つ追加
Expedition to a Romish Church　(by M.Toyama)
Raid on the Missionaries　(by M.Toyama)

③ ドロップキャップや装飾用イラストの採用で、商品としての工夫。
（米国版は原稿を集めて印刷しただけの印象。

④ 米国式スペリングを英国式スペリングに変更(次頁脚注★★)
“favorite / favourite” “harbor / harbour” “honor / honour” “among / amongst” など

⑤ スペリング･ミスや誤植の修正、フォントとレイアウトの調整。

オリジナルの米国版に比べて完成度の高い英国版はどうやら Lanman の完成版らしい。森有禮の指示により米国版を作ったのは、雇われている身ではやむを得なかっただろう。しかし、個人崇拝のような構成には抵抗感があったに違いない。雇傭関係が 1872 年 8 月で終わった経緯は判らないが、Lanman は直ちに作業を開始したのであろう。そしてその年末までに新版の出版にこぎつけた。

英国で発行したのは多分版権問題を避けるためだったと思うが、一行がロンドンに居たこととの関係もあるだろう。スペリングを英国式に修正したなど、気合が入っている。

Appendix－3

もうひとつの“The Japanese in America”

国会図書館の検索システム NDL-OPAC で［“The Japanese in America” Lanman］を検索すると８件ヒットする。とりあえず一番上のものを閲覧に申し込んだ。「本の保存状態が悪いので特別閲覧室でご覧ください」と案内されて渡された白い封筒を開けてみると、綴じ糸が切れてバラバラになりかけた 600 ページほどの本が入っていた。

よくみると、なんと米国版の表紙を剥がした本体部分(全 352 頁)の後に、頁番号も 1 から取り直した Appendix(全 251 頁)をプリントしたものを一緒に綴じ、更に、剥がした表紙と裏表紙を適当な背表紙を付けて使い直すという乱暴なもので、法的にも出版物とはいい難いしろもの。国会図書館版には“Compliments of Baron Tanetaro Megata”と仰々しく印刷してある。

	東京版（目賀田種太郎）
タイトル	The Japanese in America
日本語タイトル	米国在留日本人
著者または編者	（目賀田種太郎）
出版地、出版年	Tokyo, Japan、1926
出版社	Japan Advertiser Press
表紙	赤色に金文字で日本語タイトル
国会図書館請求記号	327.730952-J353
URL （各章の初頁のみ）	http://www.questia.com/library/book/the-japanese-in-america-by-charles-lanman.jsp

本体部分の Preface も書き直して強引に一冊にしたが、綴じ糸が切れてしまっている。これを Japan Advertiser Press という怪しげな出版社が出版している。

体裁はともかく中身をみると、Baron[22] Tanetaro Megata（目賀田種太郎男爵）なる人物の自己 PR。

Preface は自分が“Pioneer Japanese Student in the United States” として優れた教育を受け優秀な成績を修めた過程を 5 ページにわたって細かく記載している。

本論の Appendix は“The Imperial Japanese Government’s Finance Mission to the United States”と題して 1917 年に Baron Megata を団長として派遣された使節団の記録。調べてみると、これは全体の報告書[23]から Baron Megata の活躍場面を抜き書きした自画自賛の論文集と判った。

要するに、1853 年生まれの目賀田種太郎が 73 歳になって自分の過去の業績を世間に知らしめる目的で Lanman の力作に悪のりしたものだ。いくらなんでもこんなやりかたが通用するわけがない。その後これを引用した文献は見当たらない。ごく少数の自費出版に終わったと考えられる。

---

22 Baron=男爵。1907 年、男爵の爵位を授かる。

23 http://ia600408.us.archive.org/22/items/cu31924023908613/cu31924023908613.pdf

前頁★：「岩倉公一行訪米始末記」Part-Ⅱの最後の Japanese Poetry だけは著者名が Takaki から Charles Lanman に替わっている。高木三郎の作文が Lanman のお眼鏡に適わなかったものと考えられるが、本書の発行時には Lanman も森有禮も他界しているのだから、本書の原典は 1872 年版以外のものという事になる。

この謎を追ってみたことが英国版の発見につながった。

前頁★★：米国版と英国版を以下の手順で徹底的に比較した。

① それぞれの版の PDF 版をウエブサイトから入手する。

② Copy & Paste で各々の Word 版に変換する。
Copy する際には「ツール」⇒「選択とズーム」⇒「選択ツール」を選び、文書の最初の文字から Shift & ↓で文書の終までドラッグする（「全選択」は使わない）。

③ 「校閲」⇒「比較」で「文書の比較」作業ウインドウに変換済の文書を指定して「OK 」を押す。

これだけの操作で 30,000 語にもなる文書の相違点を一字一句調べることができる。

140 年後にこんな分析をされることになろうとは「 Lanman さんもビックリ」！！に違いない。

Appendix－4

（補足）そのほか幾つか調べたこと

森有禮[24]（1847-1889）

1847～　　薩摩国鹿児島生まれ。藩校造士館、藩洋学校開成所に学ぶ。
1865-1868：英国へ留学後アメリカへ渡る。
1870-1873：初代駐米公使（少弁務官）
1873～　　英語を国語として採用すべしとの論を展開し、内外の非難を浴びる。
1875：　　私塾商法講習所（一橋大学の前身）を開設
1880-1884：駐英公使
1886：　　岩倉具視の末娘と再婚
1885-1888：初代文部大臣（第一次伊藤博文内閣）
1889：　　明治憲法発布の日、国粋主義者により暗殺される。

Charles Lanman[25]（1819-1895)と森有禮、

「米下院（House of Representative）図書館の館長を勤めた Lanman[26](52 歳)は 1871 年 9 月から 1872 年 8 月まで駐米少弁務使･森有禮(23 歳)の私設秘書として雇われる[27]（肩書は American secretary of Japanese legation in Washington[28]）。」

“Life and Resources of America”は「森有禮の見たアメリカ」と言われているが、「森はランマンに“Life and Resources in America”という本を執筆させ，その緒言を書き全編を監修した．森はこれを日本語に訳して出版する腹積もりだったが，それは果たされず，日本から米国への留学生の間で原著が読まれるに留まったらしい」[29]。

Charles Lanman と津田梅[30]

駐日米国大使 Charles DeLong（一行の訪米に合わせて一時帰国した）の夫人が 5 人の世話役となってサンフランシスコに到着するが、以後森有禮が 5 人の女子留学生のいわば身元引受人となったことから、5 人は Lanman の家にホームステイする[31]。中でも津田梅は以後 11 年間を Lanman 家で Charles の妻 Adeline を慕って過ごす。Adeline との間で 1882 年（明治 15）から 1911 年（明治 44）までに交わされた 450 通の書簡が、1984 年に津田塾大学本館の屋根裏で発見された[32]。

“The Japanese in America”で津田梅について語った Lanman の第一印象が面白い

目賀田種太郎（1853-1925）

☆　Part-Ⅱ“The Japanese Students”に論文“History of Japan”がある。
☆　経歴は次の wikipedia を参照。
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%AE%E8%B3%80%E7%94%B0%E7%A8%AE%E5%A4%AA%E9%83%8E

---

24 Ivan Hall(p10)、H.Kodama(p7)、及び Wikipedia など
25 http://en.wikipedia.org/wiki/Charles_Lanman
26 http://openlibrary.org/books/OL6277612M/Leaders_of_the_Meiji_restoration_in_America
27 http://d.hatena.ne.jp/So-Shiro/20041200
28 http://discover.hsp.org/Record/hsp.opac.v01-13423　⇒["leaders of the meiji restoration in america"]
29 http://app.m-cocolog.jp/t/typecast/37548/38016/10137122
30 http://jurosodoh.cocolog-nifty.com/memorandum/2006/02/post_9ad4.html
31 http://blog.goo.ne.jp/hardsix/e/72030307b823890e9c2c3b54082d5cc2
32 http://www.caj1971.com/~kyushu/KCS_04_Shimizu.pdf